IT機器を手足代わりに、在宅ワークで社会参加する

バーチャルメディア工房アドバイザー　上村　敷洋さん＆八代衣さん（2004.1.8）

ご紹介：19 年ほど前、崖から車ごと谷底に転落され、首から下がまったく動かない身になられました。体温調整が出来ないので、きょうのような寒い日は体がこわばってしまわれるそうですが、朝５時に起きてパートナーの八代衣さんと一緒に岐阜からきてくださいました。

.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:=*:.:*=*:.:*=*:.:

トークから：

お医者さんからは「３年もてばいい、生きられるとしても一生寝たきりだ」といわれ、女房は、悔いの残らないように看取ろうと仕事を辞めてくれたらしいんです。そんな私がここにお呼びいただくようなり、女房も好きな仕事にもどることができたのは、全く動けなくなった私の手足代わりをしてくれる福祉機器の開発、人との出会いがあったからです。

女房が駆け回って探し出し、真っ先に生活の中に取り入れた福祉機器のが環境制御装置でした。息をすったりはいたりすることで、テレビの電源をいれたりチャンネルを変えたり、電動ベッドをおこしたり、玄関のドアを開けたり、そういういろんなことができるものです。口でくわえた電子ペンで、文章や・絵・図がつくれるようにもなりました。

一つでも身近なことが自分で出来るようになると、すこし自信が出てきて、外に出て行こうって思うようになります。１８年前に日本リハビリテーション工学協会というのが出来ました。第１回目のカンファレンスに障害者、当事者の立場からいろんな意見を言ってみないか、と声をかけていただて参加したのがきっかけで、さらに世界が広がりました。

１１年前、岐阜県で頚椎損傷者連絡会をつくってパソコンの勉強会を始めました。年３回「夢旅人」という機関誌を出しています。スティックをくわえたり、手に補助具をつけたり、ヘッドマスターといって頭につけた装置で入力し、自分たちで全て印刷の版下を作り印刷所に渡します。「よそではこんな障害者の理解をしているぞ」という風なことも載せて行政に配るんです。そうこうしているうちに、障害者がパソコンなどのＩＴ機器を活用して社会参加できるための相談窓口「福祉メディアステーション」を岐阜県が作ってくれ、私はアドバイザーをさせてもらってます。相談を受けたり、機器を試していただいたり、その中から色んな人がＩＴを活用しながら社会参加を目指してます。

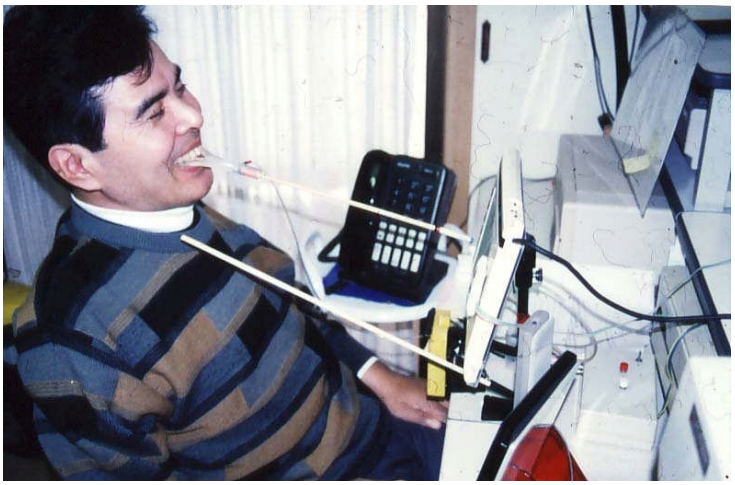
1998 年ごろから、パソコンを使って在宅で仕事をしたいっていう希望が出てきました。

で、「バーチャルメディア工房」が誕生しました。障害が重く「仕事を下さい」っていう営業活動ができない人の代わりに我々スタッフが企業や行政から仕事を頂いて、その仕事をできる人に配分をし、できたものをひとつにまとめて納品をしてその対価を頂いたら、関わった人に配分をする仕事をしています。15 名で始めたんですけど、２名が企業に就職をし、１名が亡くなって、１２名とスタッフ２名で動いてます。結婚して三つ子のパパになったメンバーもいます。

毎朝リフトをおこすやよいさん

一番新しい取り組みはＪＲ岐阜駅の「匠の集まり」のフロアに８坪をいただいてつくった、福祉工房「キッズドリーム」です。市町村の窓口に親達はなかなか行きにくいようです。我が子の障害を認めたくない、地域で相談に行くとすぐに広まってしまうんじゃないかとか、事情は色々です。駅からぷらっと来てぷらっと寄れる場所ですので、最近はすごく相談が増えてます。

我々、障害者にとっての社会参加って、植物が芽を出し葉を広げて花を咲かせて、実を実らせる過程にすごく似ている気がします。まず自分自身、障害を受け止めて土の中でしっかり根を下ろす。その土にあたるのが地域や社会や人の支援です。肥料は、養分を補給してくれ教育や訓練。夏暑い時、ほっとさせてくれる如露の水の役割を果たすのが仲間や趣味や娯楽による安らぎ。間違ったほうに行かないように剪定するような技術的支援の人達。そして、人権といった支柱。あわせて絶対必要なのが、太陽のようなあったかい人の心、これがないと我々は社会参加できないんじゃないかなっていう風な思いがしています。



上村さんとスティック

こうやって生まれた絵です。

.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:*=*:.:=*:.:*=*:.:*=*: